

# 森三千代の南方体験と移動する女性表象

楠井 清文

はじめに

森三千代（一九〇一～一九七七）は愛媛県宇和島佐伯町に生まれ、中学校の国語漢文教師だった父の影響で古典に親しみ、小説家を志望するようになつた。<sup>〔1〕</sup>作家修行のため上京を志し、一九二〇年に東京女子高等師範学校国文科へ入学。詩雑誌に作品を投稿しながら文学仲間との交流を広げ、一九二四年に詩人・金子光晴と出会い、結婚により学校を退学し、翌年に一子・乾が誕生。しかし生活に窮していた二人は、長崎に赴任していた父に息子を預け、最初の上海行に出た。三千代は第一詩集『龍女の眸』（紅玉堂 一九二七・三・二）および中国旅行に材を採つた光晴との共著詩集『鱗沈む』（有明社出版部 一九二七・五・一五）を刊行する。

その後、土方定一との恋愛が明らかになり、夫妻は関係の危機を脱するため、一九二八年から一九三二年の五年間に渡り中国・東南アジア・ヨーロッパを放浪する。その旅は第一小説集『巴里の宿』（砂子屋書房 一九四〇・三・一三）、紀行文集『をんな旅』（富士出版社 一九四一・九・一九）として結実した。作家としての地歩を固めた三千代は、一九四一年に日本軍が進駐した仏印（ラオス領インドシナ）へ「文化使節」として単身で渡り、現地の日本人外交官や知識人、安南皇帝と積極的に交流した。その見聞は、紀行文集『晴れ渡る仏印』（室戸書房 一九四二・八・一五）、安南の伝説を集めた『金色の伝説』（協力出版社 同・一二・一〇）、童話集『龍になつた鯉』（育英書院 一九四四・二・二〇）、フランス語詩集『POÈSIES INDOCHINOISES』（詩集インドシナ）（明治書房 一九四二）にまとめられた。

以上の経歴から分かるように、三千代の文学者としての自己形成において、移動は大きな比重を占めている。先行研究でも、土屋忍は「戦前に海外を旅行した（できた）女性作家」であり、

それを「書く主体として生きられた（中略）著述業者」だったこと、また「日本語以外の言語で作品を発表」した点に注目する。<sup>(2)</sup> このような移動の経験は、三千代の文学でどのような意味を持つのだろうか。

ここで確認したいのは、近代日本の女性にとっても、移動は重要な経験だったことである。「戦前期の日本人の移動では女性の割合が多かった」のであり、主に貧困や家の存続といった要因から、女工や女中といった出稼ぎ労働者または娼婦として、農村から工場や都市圏へ、さらに東アジア・東南アジアなど海外にまで働き口を広げていった。また他方では、教員や看護婦などの資格を得るため進学する女性もいた。「出稼ぎ先の工場や満州などで女性は多大な苦難を味わう一方で、都市での生活経験や資格取得によって女性の認識や世界が広がる面もあつた」。<sup>(3)</sup>

牧洋子は、三千代の上京について、師範学校に入学しながら「作家」を目指した所に「常識」「通念」に対する「叛乱」の意図を読み取っている。<sup>(4)</sup>『龍女の眸』「自序」には、「自然のまま

ならば、当然就くべき教職といふ運命は私のやうな人間には無理だといふことをさとつて」いたとあり、三千代は自己の「自然」が「教職」といった固定的な社会規範の枠内に収まるものでないと自覚していた。そのような彼女にとって、移動は旧来所属していた「世界」や「認識」の輪郭を拡張し、既存の秩序内で見出せなかつた、自身の居場所を探求する意味を持つてい

たのではないだろうか。<sup>(5)</sup>

以上の観点から三千代の小説を見ると、移動する女性達を主人公にした作品の中で、居場所の喪失・希求と移動というモチーフが密接な形で展開しているのが分かる。<sup>(6)</sup> 中でも三千代自身の南方体験を題材にした作品では、東南アジアに出で行った「かれゆきさん」ら日本人女性の姿が描き込まれている。同じ海外渡航でもパリとは異なり、彼女達の移動は社会的地位の上昇に繋がるものではなかった。むしろ賤業として蔑視された彼女達の内面に、三千代は了解可能な心理的形象を与えようと試みる。また現地人女性に対して、皮相的な把握ではなく、各地域の制度によって抑圧された面に目を向け、女性という立場の共通性から接点を求める。

このように、多様な境遇の女性達との接触から、三千代は居場所のなさという自身の感覚を明晰化していくのではないだろうか。そして、それは戦時下の、女性に積極的な役割を求める居場所を与えるとする言説への距離感として機能したと考えられる。

三千代の最初の東南アジア体験は、光晴と放浪したマレー半島および蘭印（オランダ領東インド）である。原満三寿作成の「年譜」（『金子光晴全集』第十五巻 中央公論社

一九七七・一・三〇 所収) および同氏の浩瀚な『評伝金子光晴』(北渢社 二〇〇一・一二・一七) をもとに、旅程を確認しておきたい。一九二九年六月シンガポールに到着後、『爪哇日報』の主催・斎藤正雄を頼りジャワ島のバタビアへ渡る。その後斎藤とのトラブルがあり、ジャワ島を東漸、ソロー、ジョクジャを経由して『爪哇日報』スラバヤ支局の松原晩香の世話になつた。渡欧の旅費が尽きたための止むを得ない迂回だったが、結果的に光晴の『マレー蘭印紀行』(山雅房 一九四〇・一〇・二〇) や、三千代の南方ものを生み出す契機となつた。一人分の旅費を捻出した後、まず一月に三千代が出発する。光晴はさらにマレー半島を北上してから後を追つた。一九三二年の帰路でも、単独先行した光晴はマレーを再訪しているが、三千代はシンガポールで再会した後すぐに帰国しているので、十分な時間があつたとは考えにくい。光晴と迎つた六ヶ月が、彼女のマレー・蘭印体験と言えるだろう。

木村一信は三千代のジャワ紀行文について、実際は同行二人の旅だったにも関わらず、「装いとしての女・ひとり旅に見える技法」を指摘し、そこに光晴の影響を排して自身の感性を研ぎ澄ます意図があつたとする。<sup>(7)</sup> また光晴と三千代の海外体験について詳細な研究をまとめた趙怡は、この時期に三千代が精力的に作品を発表していたことに触れ、特に「詩と紀行文から小説創作へ転じた時期の作品」であることに注目する。<sup>(8)</sup> つまり、南方体験は小説家・森三千代の形成に重要な役割を果たしたの

である。三千代の紀行文は、自身で「日本の友達や知人」への「報告」と位置付けるように、<sup>(10)</sup> ジャワの歴史・文化・名所旧跡などを日本の読者に紹介するものとなつていて。ここでは報告者「私」の抱いた感興が綴られるものの、当然ながらその輪郭が崩されることはない。

しかし、紀行文の中でも、「私」の輪郭を越えて他者に向かおうとする姿勢が見られることがある。それはソロー、ジョクジャの二王国の遭構を訪れた際、国王に仕えた宮中の女性に思いを馳せる場面である。<sup>(11)</sup> 書き手は、「オランダ人の人心収攬政策」のため実権を奪われて形だけ「封建制度の夢に浸つてゐる」王国に、他の地域では見られない「神經質なデリケートな美しい」と「頽靡」を見出す。同様の観察は光晴も「蘭印の旅から」<sup>(12)</sup> 『婦女界』一九四〇・一二で行つており、実際には二人の体験が重なり合つていてることが分かる。だが、光晴はジャワ人女性の解放運動に触れて同時代の変化を述べるのに対して、三千代は過去に国王の慰み者となつた女性の悲哀を想像する。

王さまの命令で、濡れた黒髪をひきづられて、嫌悪なしに泣きながら犠にあがる美しい娘たちの姿が、いま、目に浮かぶやうでした。(中略) その髪から落ちたしづくが、石のくぼみのどこかにかたまつてゐさうな気がする。その膚でぬれたしめりが、石肌のどこかにのこつてなさうな気がする。それよりも、生き生きした乳房から打つた鼓動が、

石の心臓から脈打つて来さうな気がするのです。

私は、思はず、人差指で、石の面をさはつてみたものでした。

ここで「私」は、日本人／ジャワ人という関係とは別の軸で、共感可能な接点を探そうとしている。実際には「前から渡つてきている日本人たちが、現地の人たちとは主人と召使いとの付き合いになつていまして、それでどうしても友だち同士というふうな付合いは少ないんです」と回想するように交流はなかつたが、小説ではジャワ人女性に「親しみ」を感じる日本人女性が登場し、さらに仏印を舞台とした作品では、現地人女性と日本人女性の被抑圧者としての共感がテーマとして描かれることがある。

## 二

この時期の小説には、マレーを舞台にした「国違ひ」『新潮』一九四一八・「帰去来」・「ひとりもの」（以上『国違ひ』所収）と、蘭印を舞台にした「南洋小説 赤道に咲く」『大陸』一九三九一・「雨季」と改題・加筆して『巴里の宿』所収）・『南溟』（『南溟』所収）・「泡沫」・「南方へ嫁いだ女達」『むらさき』一九四二一以上『国違ひ』所収）等がある。異国社会で暮らす日本人女性の奮闘と悲哀が、実にリアルかつ繊細に描かれていた。

「...」と評価されるように、移動する女性達を多く主人公に据えているのが特徴である。では彼女達はどのような人物形象がなされているだろうか。

例えば「南溟」の笙子は、ジャワ最初の日本人医師として客死した父の墳墓を訪ねるべく、以前父の用人だった伴野を頼つて渡航する。彼女は、かつて伯母が勝手に進めた縁談により結婚した夫がアルコール中毒で、一度は自殺まで考えたが「出戻りを不名誉がる伯母の虚榮心」を弁え、四年我慢した末に離婚した。その後、伯母への反発も手伝つて恋愛に走るもの「物足りなさ」を感じていた。やがて女飛行士になつてジャワへ飛ぶという「他の女の滅多にやらない」壯舉に出ようと二等飛行士の免状まで取る。しかしそれも実現しないまま、「男を引きつけるため」の「型のかはつた」女として噂されるだけに終わっていた。伴野は恩人の娘と思いつながら、次第に彼女への欲望を募らせていくが、その内心を知られた上に、父の財産を騙し取つたという以前からの疑惑を笙子にぶつけられる。

また「泡沫」のとよは旧家の出身で、「できるだけ控へ目に心をいためて生きてきた」が「底は意地つ張り」という性格で、最初の結婚は「我儘者扱ひ」されて破綻した。家柄の低い商人の家の出の加藤と夫婦になるが、「世間体」を重んじる実家から絶縁される。その後の流浪で、やはり複数の男性から性的欲望の対象とされかけたが、それを凌いで流れ者の芸人として、加藤と共にスマトラのメダンまでやつて来る。

このように三千代の作品において、南方へ渡つて来る女性達は、日本国内で家制度に馴染めないものを感じている。妻といふ性役割を拒絶し、家の内部に居場所を持たない彼女達は、それに代わるものを探して流浪する。南方とは、そのような家の桎梏が解体する場所として描かれるのである。

例えば「南方へ嫁いだ女達」では、写真結婚で相手を知らなまま四国から南方の島に嫁いできた若い女性が、突発的な事故で花婿を失う。身寄りのない彼女は、世話をしてくれた島でただ一人の日本人理髪師と家庭を持つ。そこへ花婿の弟が、死んだ兄の代わりに日本からやつて来るが、既に立ち入る間もなく帰国する。その顛末を見ていた主人公の富子は、かえつて弟を気の毒に思う。弟の行動は、家の存続を優先する論理からは当然のものだろう。しかし「何一つ人間精神の支へになるものない南海洋上では、この娘のやうな波のまにまにの動きかたが、ひどく自然のゆきかたにかな」つている。そのような南方のあり方を知らない弟に同情するのである。

家の規範を解体する南方というテーマは、「国違ひ」「帰去来」であり先鋭に描かれる。この二編は、生前編集された作品集『森三千代鈔』（濤書房 一九七七・八・一五）にも採録されており、「この二つの小説の素材は、金子光晴からもつた。なお、知らない場所の情景について、彼の実際の見聞に負うところが多い」という「付記」がある。

「国違ひ」は、マレーのゴム園で働く宮崎技師を視点人物と

して、マレー人夫の口入れ親方ガンボとその妻・園子の夫婦生活を描く。ジャングルの奥地へ赴任してきた宮崎の前に、珍しい「同胞の女」が現われた。彼女は「失踪した許婚者のあとを桎梏が解体する場所として描かれるのである。

マレーの奥地をさまよつてゐるあひだに、誘拐業者の係蹄にかかり、身の自由を奪はれた」。その後、「ガンボが金を積んで引籠ふやうにマレー人部落に連れ去つて今日にいたつた」という園子の人物像は、前述のように光晴の提供した題材に基づいている。光晴の記述によれば<sup>(15)</sup>、マレーで消息を絶つた元軍人の夫を探しに来た「小野芳子」という人物で、「女衒の罠にかかつて、辺地を流れあるくからゆきさん」の仲間になつてしまつた（※傍点原文）が、「人足の監督をしている、手におえないあぶれ者」の「ゴンボ」という男と一緒になつた。彼女が現地日本人の間で有名だつたのは、人々の好意で何度日本に送り返されても、また戻つて来たからだという。「マレイの女とかわらない姿の、四十歳をもうよほど越しているはずなのに、なまめかしい表情」という光晴の描写が示すように、マレー人と結婚した彼女の周辺には、性的な揶揄と好奇そして蔑視の念があつたのではないかと推測できる。

ここで「小野芳子」の前身とされる「からゆきさん」については、戦前期から紀行文・論説・小説など多くのテキストが書かれてきた。<sup>(16)</sup>歴史的には「淫売」「醜業婦」「賤業婦」「娘子軍

ていた日本人女性の総称である。<sup>〔17〕</sup> 彼女達の特徴は、あらゆる国籍の客を相手としたことで、現地の白人・華人・マレー人の妾となつた事例もあつたという。

日本人の紀行文には、異なる民族の男性と結婚した「娘子軍」の女性を、「土民化」したとして嫌惡する言説が見られる。例えば鳥井三鶴『世界徒步十万哩無錢旅行』(広文堂書店一九一九・六二〇)は「売春婦及土民化せる女の不快さ」として、「馬来人、支那人、蛮族等」の「妻妾」になつた女性を否定的に描いている。

土人の巡査の妻となつたものに会つた。(中略) 心も身もも早やマライの血で爛れてゐた。耳に穴を穿つて金環をさげ、手足の首にも金輪を穿めてゐる。サーロント称する馬來の衣服をきて素裸足である。言葉も馬来語である。日本人に会つても日本語を話さない。否、話すことが出来ないのだ。

三千代は紀行文「国違ひ」の人々において、シンガポールで滞在したホテルの主人が「女銜仲間の親分」で、その妻も「もとはやつぱり天草、島原あたりからかせぎに出てきた女の仲間」だったと書き留めている。また光晴の『マレー蘭印紀行』にも、「島原地方のなまり」を持つホテルの女主人から「娘子軍」の悲惨な末路を聞く「コーランブルの一夜」がある。三千代は南方で、右に述べたような境遇の人々から、直接話を聞く機会もあつたのではないだろうか。

「南溟」では「娘子軍のなれの果て」の女性を描いている。彼女はかつて「土民の妻」となつたが夫に死別して、今は日本人と結婚している。しかし、「土民の生活にまで落ちた自分をいやしいもの」と「卑下」し、現在の夫も「この女を妻にしてゐることを日本人同士の社会で羞ぢて」いる。「国違ひ」の園子に対しても、この「日本人同士の社会」の圧力が降りかかる。彼らは園子に対して、「オラン・マレーと一緒になつた女をさげすむ口振りで噂」し、また「マレー人のなかでも醜怪なガンボのやうな男と、つれ添う悲運の女」として同情する。そして「日本人らしい潔癖」から「ガンボの手から彼女を救ひ出して日本へ返してやらねばならない責任感」を覚え、「彼女の現在の生

活が日本人としていかに恥辱であるか」を訴えて帰国を促す。

しかし、園子にとつて日本は帰属すべき場所だろうか。確かに説得に応じたような態度を取るが、それは「ながらく異邦人のあひだに暮して、自分がないやうに思ひ做してゐたのを、にはかに同国人達の興味と関心の的」になつたからであり、「男達の好奇心と同情とでちやほやされる怡しさ」に浸つっていたかったからである。つまり、従前の「日本人同士の社会」から向けられた蔑視との対照が、現在の態度を選択させている。そして「南洋へ来たことが彼女にとつてそもそも間違ひであつたやうに、いま日本へ帰つてゆくことも間違ひのやうに思はれ、心もとなくてならなかつた」と感じられる。

最初から「娘子軍」として出稼ぎに來た訳ではない園子は、それによつて故郷から疎外される謂れを持たない。だが、続編の「帰去来」では、「故国日本に、彼女の小さなからだ一つを休める空席がなくなつてゐた」とある。彼女の出奔は、九州南部の漁村で網元をしていた父が急死したのが理由である。母は別の男と共に園子を連れて上京するが、二人から冷遇された彼女は、居たまゝ故郷に戻る。頼つた伯父からは酷使され、出会つた男と「南洋に二人の新天地を見つけよう」と目論む。伝手のあつた男から先行するものの、待ち合わせの香港に着いた時、相手はシンガポールへ立つた後だつた。

このような園子の人物像から分かるのは、「南溟」「泡沫」の主人公と同様に、家という居場所を持たないことである。そし

て帰郷しても、人々は「南洋帰りの金ぶくれのした彼女のまゝりに、血を吸う虫のやうに集つて來た」。日本は決して彼女にとつて安住の地とは示されていない。

このように、園子が日本からマレーへ戻つて來たのは、作中「ガンボの呪詛」として人々に噂されるような、本人の意志を超えた束縛によるものではなく、むしろ彼女自身の選択した行為なのである。それはやがて、「ガンボの血のなかにも、もやはや、ほかでは、どこへ行つても求めることの出来ない、心を虚しくして身を委せられる頼りがあるものが流れてゐる」という形で、南方に自身の居場所を見出すことに繋がる。そして二人の子供を持ちたいという望みを抱く。

彼女はかつて、「種族のちがつたあひだに生れた子供が不仕合せなばかりでなく、祖国の恩恵から遠くはなれて生ひ育つ日本の子供達の不自由さ、不如意さを見聞きしてゐることからそれを恐れて來た。しかし、「国違ひとのあひだの子供のひけ目や不幸も、ガンボと自分の愛情でおほひつくすことの出来る」と思うのである。

物語は夫婦のすれ違いを示して、それが回復されるのかどうか判明しないまま終わる。必ずしも子供の誕生が、最終的な解決にならないと、作者・三千代には意識されていたからだろう。いずれにせよ重要なのは、「何年か使はなかつたらしい日本語がぎこちなくなり、着物の「着方を忘れ」て「借りもの」のように感じられ、「裸足で歩くので足の裏の肉がこはばつて薄

紅を帯びてゐるのまで、土人臭さがしみついてゐた」と、「土民化」した女性としての外見を持つ園子が、居場所を希求する内面を持った、感情移入可能な存在として形象されている点にある。民族や国籍を自分の意志で越境していく女性の動機を、それまでの境遇との関係で描いたのである。

#### 四

三千代の二度目の南方体験は、「大東亜戦争」開戦の翌一九四二年一月のことである。羽田から迷彩を施した航空機で飛び立った三千代は、ハノイ到着後、大使館の助力を受けてハイフォン、フエ、サイゴン、アンコール・ワット等を巡り、四月帰国した。光晴の回想によれば、詩人外交官だった柳沢健が三千代に依頼したものだった。「柳沢健のところから、森のもとへ、文化使節として仏印ハノイへ行つてくれという相談がきた。軍ではなく外務省からで、宣撫ではなく、親善のためだといふので、僕は、ゆくことをすすめた」。<sup>19</sup>原の評伝によれば「国際文化振興会の対仏印日本婦人文使節」という肩書だつた。

国際文化振興会は、外務省からの補助と民間からの寄付を受け一九三四年四月創設された、最初の国際文化交流事業実施機関である。<sup>20</sup>外務省文化事業部に属していた柳沢は、「文化外交」の重要性を認識していた人物であり、特に日中戦争・国際連盟脱退などの局面に際しては、海外で「殆ど日本に対する認

識と云ふものが出来て居ない」ために国際社会で日本の立場が理解されないと考え、「日本の眞の姿、日本の文化」を紹介し知日派を増やすことが国益に繋がると主張していた。<sup>21</sup>実際に事業内容の決定では大きな役割を果たしており、「事業綱要」では海外での日本文化に関する講演会・展覧会の実施や出版物の寄贈、外国大学での講座設置、研究の便宜提供などが挙げられている。<sup>22</sup>光晴が回想する三千代の活動に「日本古典文学について講演」とあるのも、そのような背景があつたのだろう。

ただし、一九四〇年に外務省から内閣情報局へ管轄が移され以降、情報局や軍部の「下請け」として「大東亜共栄圏」に関する宣伝や資料調査が比重を占めるようになつていった。例えれば機関誌『国際文化』一九四二年二月号は「特輯 南方文化事情」として、西村真次「南方共栄圏の文化工作の特殊性」といった論文が掲載される。三千代の派遣も、このような流れの中で実施されたと考えられる。仏印はタイと共に日本軍の軍政が敷かれておらず、振興会が独自に活動できる数少ない地域でもあつた。

そもそも日本の仏印への積極的な関与は、日中戦争の長期化に困難を感じていた日本が、援蒋ルート遮断を目的に行つた一九四〇年九月の北部仏印進駐がきっかけである。フランスのドイツ敗北に乗じて圧力をかけ、一九四一年七月には南部仏印進駐を行なう。これらの軍の行動は、結果として英米との対立を深め、一二月の開戦に繋がっていく。<sup>23</sup>重要なのは、仏印で

はまだフランスの主権が保たれており、西洋の植民地支配からの解放を掲げた「大東亜共栄圏」の構想とは矛盾があつた点である。なおかつ、軍からは振興会に対して南進の軍事的意図を力モフラージュするよう直接的圧力があつた。<sup>(24)</sup>このように、異なる立場の複数の思惑が重なり合つた所に、三千代の仏印行きは成り立つていたと言えるだろう。

以上から分かるように、二度目の東南アジア体験は、一度目と大きく性質を異にするものだった。公的な後ろ盾を得ての旅であり、三千代自身は紀行文『晴れ渡る仏印』で「物を書く人間の癖で、台所のきたないところに興味を持つ私も、今度の仏印行きは、玄関から行くお客様として来てるので、安南人旅舍に宿泊するわけにはゆかなかつた」と述べている。「文化使節」としての旅は、「安南人」の「台所」つまり生活にまで触れることを許さなかつた。このような立場は、どのように南方を見る視点に反映しているだろうか。

土屋は『晴れ渡る仏印』について、日本軍の暴力性やフランス植民地支配に対する批判、現地の独立運動に対する言及が見られないことから、本書には「書かなかつた仏印」が多く含まれているとする。<sup>(25)</sup>また趙は三千代の未発表日記を参照して、現地日本人の「安南人はどちらうですよ、なまけもので嘘つきで」といった言葉や、「仏印は要するにフランス人達が自分達に如何に住みよく、ぜいたくに暮らすかについて考へてつくつたところである」といった感想が『晴れ渡る仏印』で採用され

ず、逆に日本軍を称えたり、シンガポール陥落や紀元節を祝つたりする場面が加筆されたことを明らかにした。<sup>(26)</sup>

以上のような『晴れ渡る仏印』の特質は、「文化使節」という役割に忠実に応えようとした結果だと言える。従つて、三千代の仏印体験について考察する際には、テキストが制約下に発表された点を勘案しなければならない。では、その上で何が読み取れるだろうか。「安南人」を一様に規定する現地日本人と異なり、彼女は仏印の文化に混在する複数の要素を見出す。フランスの植民地支配によつてもたらされた西洋文化と、旧来から存在し生活の一部に溶け込んだ中国文化の葛藤である。

フランス流に教育された人達は、フランスを祖国とすることに誇りを持ち、巴里に行くことを終生の望みとしてゐるものも少くない。古い儒教的な家庭と、新しいフランス流な考へとの間の葛藤が、最近の安南での重大な問題であり、文学上の主要なテーマにもなつてゐるのだ。

(「教育と日本語」)

手材として取上げられるものは、主として、迷信深い道教、仏教と、儒教精神でつくりあげた因習的な古い家庭内に、フランス風な新しい思想が流れこみ、古い世代と新しい世代のまじりあふ悩み、苦しみである。

(「仏印の文学」)

しかし、「フランスのほひのかからない土着の安南の言葉による文学の世界に、ぢかに触れる安南の世界と、安南人の魂がある」と述べるように、さらに古層として安南土着の文化があるとする。これは後の伝説採集へと繋がる視点である。『金色の伝説』「序」では、伝説と一体化した安南人の生活に触れ、中国との複雑な関係が安南文化を規定していると説く。

安南人の生活の上に、支那文化の影響を忘れることが出来ないやうに、安南の伝説の上にも支那は重大な役割をしてゐる。

孔夫子の教へを国教としてゐる安南では、儒教道徳の美德が伝承されてゐるとともに、儒教的なものの考へかたがそのままとりいれられてゐることも多い。(中略)

しかし、安南にとつて支那は、文化の源といふ役割を果しあしたが、同時にまた永遠の敵であつた。(中略)安南は、幾度か支那に征服されて郡県になつた。その都度、英雄があらはれては、その圧迫から脱け出して独立国家をつくつたが、支那の勢力から完全に切りはなされることが出来ず、封冊をうけ、貢物をさゝげて和平を保たねばならなかつた。安南人の一つの性格の、あの憂鬱さは、そんなどころに胚胎するのかもしれない。

伝説に見る「現世超脱の傾向」が、「利害にあくせくしない」「非現実的な夢想家」である「今日の安南人」にも通底するという指摘は、現在の人々の行動を、長い歴史的過程の中で形成されたものとして理解しようとする姿勢に繋がる。土屋は三千代の伝説採集について、「自分が訪れた場所に対し、伝説理解を通じて近づこうとする意識」「異文化理解、他民族理解」の意図があるとする。また「[文字] や「書物」の存在を見定めながら、それらの力が及ぼす範囲やそこからこぼれおちるものを重視している」とも指摘している。<sup>27)</sup>

このような「文字」「書物」といった公的な記録に留められない、口承の世界への眼差しは、現地知識人との交流から得たものかも知れない。三千代と親しく交際した文学者・阮進朗は、「安南人が常に漢字を用ひ、孔子の教へを受け、仏教でさへも支那を介して安南に伝へられた」と述べながら、「支那の模倣」以外に「安南民族固有の宝が古伝説中に含まれてゐる」とし、それらは「オフィシャルな文学、宗教、歴史中には見いだされないものであるが、一民族の心理的特徴を明確に表はし、その文化を産んだ国民の精神を表明する」と述べている。<sup>28)</sup>

しかし、三千代の異文化理解の型は、彼女自身の関心に規定されているとも考えられる。中国文化の根底的な影響を否定する背景には、それが安南人女性の抑圧をもたらしたという認識があるのではないだろうか。「安南の旧家では、父母の権力は絶対である。婚姻も父母の意志によつてなされ、夫を失つた女

は、再婚することを許されず、三年の喪に服さなければならぬ」と述べ、「日常生活のうへに、儒教的なモラルが、こまか

い点にいたるまで生きて支配してゐる。／古い支那が、安南で呼吸してゐるのだ」と断定する。従つて、フランス文化の受容も、彼女達を解放するという点で評価されるのである。

古い伝統的な生活の固陋な部分だけがなくなつて、フランス文化の合理化されたものが生活を明るくしてゐる。伝統の犠牲により、多く禍されてゐた安南の女達の運命も、いまでは、女としての仕合はせをうけとることが許されるやうになつて來てゐる。

このように見て來ると、仏印についての記述は、異文化に関する客観的な記録というよりは、三千代自身がそこに何を見出そうとしたかを示す、私的テキストだと位置づけることもできる。そもそも家制度の轭に繋がれた女性は、先述したように蘭印を舞台とした作品に頻出するモチーフだった。三千代は、家から逃れるために南方へ渡つて來た女性達を描いたが、仏印小説では日本から來た女性が、同じ束縛を受けた現地の女性と出會う。そこでは共感による交流と、自民族中心主義に陥らない感情移入のあり方という、困難な関係性を描こうとしているようと思われる。

仏印に関する小説は、単行本『おもかげ』（大都書房一九四三・一〇・一五）・『豹』（杜陵書院一九四九・三・五）等に収録されている。「安南」（中央公論一九四二・五『豹』所収）は、西洋化によつて伝統の桎梏から逃れた安南の女性が、再び男性中心の秩序に束縛される姿を描いてゐる。この小説は、ほぼ作者と等身大と考えられる語り手「私」が見聞した、安南人女性・文祥連とフランス人男性・リアラン夫妻の姿を主題にしてゐる。祥連は親の決めた許婚から逃れるためにフランスへ渡り、そこでリアランと出会う。親の認めなかつた結婚を遂げた彼女は、「固陋な一族一門」から白眼視されている。

祥連は移動によつて旧弊な家制度から逃れたが、夫リアランによつて自由を奪われてゐる。彼は「安南の服装をして安南の美しい黒い髪をして、安南女らしくつましくしてあればゐるほど奥床しく見える」と「私」に語り、「自然に従順な東洋の美しさ」を妻に求める人物である。実際に、祥連が「夫の身邊にこびるやうにまとひついて、絶えず気を付け、おそれるやうに黙々と、足音を忍ばせて前を歩む」姿を見て、「私」はリアランの心底を「殿様の味の忘れられないために東洋を賛美する人達の一人」だと看破する。そして「おぼつかない言葉の手引」を介しながらも、「女に共通な心のいたみにだけ触れあふこと

## 五

三千代の仏印小説を論じた張雅は、このようなアランの人物像について「オクシデント」（男）－「オリエンタル」（女）の不均衡な関係に固執する「オリエンタリズム的世界観」の持ち主だと的確に論じている。<sup>(29)</sup>彼の態度を「どんなフランス人の心のかたすみにも少しづつある古美術鑑賞の気持」と同様だと断ずる「私」の觀察は、この指摘を裏付けていよう。リアランと祥連の関係は、男性優位と植民地支配という二重に不均衡なものであるばかりでなく、相手を美的に称揚することで、そこに働く権力を隠蔽している。

だが、ここで注目したいのは、書き手もまたオリエンタリズム的な眼差しを免れていないことを、作品が明らかにする点である。同じ単行本に収録された「豹」は、「日仏印文化親善の身にある使命」を担った「私」の要望により、アンコール・ワットの前でプノンペンの「舞姫」達に、伝統の宫廷舞踊を躍らせる場面から始まる。「私」は偶然機会に恵まれたように述べるが、「戦争がはじまつてから」という記述や同行者に「軍属」の人々がいる点から分かるように、日本の進駐軍が圧力となつたことは言うまでもないだろう。帰途、「私」は立ち寄つた村で豹の子供を譲り受ける。「森の王者」の貫録を感じ、クメール族と同じ「森の一族」だと考えるが、そこから引き離すことには躊躇いも覚える。

らしものにしたら、あの神秘も、妖しさも型になつて、まるで精彩のない、場違ひなものになつてしまふことだらう。（中略）私達の連れてゆく豹の子も、そんな運命に突き落とされるのではないだらうか。（中略）私達の生活に馴れ親しませることが、豹の子を幸福にするとは思はないまでも、特殊な運命を賦与してやることが出来るやうに考へてゐる。しかし、その考へも、おろかなあそびごとに過ぎないやうだ。

この予感通りに豹の子は死んでしまい、「私」は「それが豹の子であつたのか、アンコール・ワットの夜天舞踊からさらつて来たカンボチヤの舞姫だつたのか区別がつかない気持」になる。ここでは土着の存在を賞玩して占有を企てた「私」が、結果的に対象を死に至らしめる。クメール人の「舞姫」と豹の子を重ね合わせたイメージが、「私」の意識されない権力性を明らかにするのである。

以上のように三千代の仏印小説は、かつて蘭印体験で扱つた主題を受け継ぎながら、語り手自身の立ち位置を相対化するなど、より重層的な視点に拠つてゐる。最後に「売店の女」（新創作）一九四二・八『おもかげ』所収）を対象に、移動する女性像が、戦時下にどのような達成を遂げたかを見ておきたい。

野外舞踊のいぢらしい舞姫達も、都会の舞台の上にさ

主人公ゆきは、かつて別の女性に奪われ離別した夫を追つて、中支・広東・ハノイを転々としてきた。彼女はデパートの支店

の売り子をしており、「台湾生れの日本娘」を「監督」する程に信頼を得ていた。その周辺に日本の南進論の熱気が漂つて来る。

彼女が日本を去つてから、すでに足掛け三年になるが、このあひだの日本の変りかたがなにかおそれしかつた。急激に同胞達が南へ南へとはげしい意欲と希望をもつてひしめいてゐるありさまが、新しく日本から来た人達の言葉のはしで想像することが出来るのだった。彼女が仏印にゐるといふことはすでに、生き甲斐のある生きかたをするうへに、一つのよい条件を与へられてゐるといふふうに考へられもするのだった。

南方で活躍する日本人女性について、三千代は「共栄圏に働く邦人女性 若き女性の姿逞し」『婦人朝日』一九四二・七「仏印の若い女達」と改題して『晴れ渡る仏印』所収)で次のように書いていた。

南方で活躍する日本人女性について、三千代は「共栄圏に働く邦人女性 若き女性の姿逞し」『婦人朝日』一九四二・七「仏印の若い女達」と改題して『晴れ渡る仏印』所収)で次のように書いていた。

気を持つて女性達の発展を心からうれしいと思つた。

（二）で三千代は、「消極的」な立場に留まらない、新たな女性像の登場を称賛しているように見える。しかし南方へ進出し

た彼女達は、本当に従来の規範を脱したと言えるのだろうか。

同時代の言説を見ると、そこでは依然として家制度の内部で役割を果たすことが求められている。例えは南洋庁官吏だった守安新二郎は、『大南洋の現実』（遠藤書店 一九四二・八・一〇）で「日本女性の南進」という章を設け、「青年を飽くまで南の天地に踏み止どまらせ、南の天地を開拓させること」が、今日の女性に課せられた大きな役割」と述べる。彼女達「南洋への花嫁」は、日本人男性と「原住民女性」との「雑婚」を防ぎ、「文化的に低位」にある「南方女性」を「指導」して「日本の婦道」

を徹底させるという使命があるというのだ。同様に家庭生活の啓蒙書や育児書を刊行していた婦人運動家の伊福部敬子も、「南方共栄圏の花嫁」について「南方共栄圏の範囲に進出して原住民の間に立つて指導誘掖してゆくためには、どうしてもそこに健全な家庭を打たてゝ、彼等に模範を示す」ことが重要であり、また「混血」は「その間に生れる子供が、果して日本人としての精神を継承するか」疑問であるから避けるべきだとする。<sup>30)</sup>

つまり、南方の日本人女性に求められていたのは、「純血」イデオロギー<sup>31)</sup>を保持するために、貞淑な妻あるいは母の役割に留まることがだつた。作中でも、外国生活に倦んで帰国を考え

たゆきに、親交のあつた日本人商人が同業者との縁談を勧める。

それでも気持ちを変えなかつた彼女に、探していた夫の消息がもたらされる。彼は一緒になつていた女性と別れ、今は日本に戻つているという。それを聞いたゆきは、夫に対する執着が失われるのを感じる。

夫に対する愛着だと思つてゐたものは、やはり夫の女に対するたゞかひであつて、女が夫からはなれたと知つた時には、ぬけがらしか残つてゐなかつたのだ。

幾年振りかで、彼女は、肩が軽々としたのを感じた。同時にあくせくとしておちつきなくさまよつてゐた気持が、風のやうに、ぴたりと静かになつた。

今までの生活は、すべて休止符になつたことを彼女は知つた。彼女が日本へ帰つてゆく理由は、もはや、なにもなかつた。

鎧窓をあけて寝台に仰むけにねて、暑くなりさうな朝の空を眺めてゐると、はじめて見るやうな新鮮さでひらけてゐた。その空のひろさや明るさは、いまの彼女の心の状態とよく似てゐた。透明な虚しさと、執へどころのない空間に、今までとはちがつた、確信のある自分が待つてゐるやうだつた。しかし、大きな打撃とながい疲労のあとでまた回復期にある現在では、それがどんなかたちになつてゆくものかわからなかつた。

この突然の変化をどのように捉えるべきだろうか。夫による精神的な呪縛を脱した彼女は、日本に帰る必要もなくなり、新たに南方に居場所を得るのだろうか。確かに、ゆきが日本人商人と結婚して家庭を築くならば、「自分がお国のためにはたらく場所はここなのではないか」という、以前に彼女の抱いていた思いを実現することにもなるだろう。

しかし、「かたち」の不分明な「自分」という表現は、安定した結末を必ずしも想起させない。彼女の身の振り方は未決定のままである。むしろ、ここで描かれているのは、移動の中に行たれた「休止符」のような時間ではないだろうか。ゆきの抱く「虚しさ」「執へどころのな」さは、「夫」や「日本」が象徴する、帰属を強いる共同体からの解放感を意味するように思われる。

### おわりに

森三千代の南方小説は、これまで見て來たようにマレー・蘭印と、仏印を主題とした二つの作品群に大別できる。前者では何らかの形で日本国内の社会に住みづらさを感じた女性達が、居場所を求めて南方へ移動する姿が描かれていた。その過程で、彼女達は家制度や人種・民族といった、堅固で自明なものと考えられていた境界線を越えていく。その有り様は、境界線の内

側の思考から見ると、奇異で蔑視るべきものに映るが、三千代は彼女達の内面に即して、その都度主体的な選択を行う人物像を形象している。ここには、あるべき居場所への「郷愁」を抱いて旅を重ねていた三千代自身の感情が投影されないと考えられる。

後者においては、仏印全体の文化構造を捉えようとする、人類学的な態度が見られる。ただしここでも根底にあるのは、抑圧された女性への共感である。時にそれは安南人女性との交流という形で示され、また自身の立場への自己反省に繋がることもある。さらに、戦時下の女性の「南方発展」を称揚する言説に対しても、それと同調するかに見えながら微妙に異なる人物像を通して、違和感を表明しているのではないかと推測した。

森三千代の南方小説における移動する女性像は、家・民族・植民地・戦争など、彼女達を拘束する力学を明らかにしている。「安南人の唄は郷愁に満ちてゐる。家郷にあつては遠い旅にあくがれ、旅の空にあつては、はるかに故里に心を走らせる」『金色の伝説』と述べているが、三千代の作品はもう一つの「あくがれ」、つまり制度からさまよい出ることへの志向を表明したものだと言えるだろう。

## 注

(1) 森三千代の伝記については原満三寿『評伝金子光晴』を、書誌情報については趙怡「森三千代作品リスト」(『一人旅 上海から

パリへ 金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学』関西学院大学出版会 二〇二一・三・三〇 所収) を参照した。

(2) 土屋忍「森三千代の南洋文学——翻案としての安南伝説——『南洋文学の生成 訪れる』ことと想うこと』新典社 二〇一三・九・二〇 所収)

(3) 大門正克「戦前期の日本女性の移動」(吉原和男編集代表『人の移動事典 日本からアジアへ アジアから日本へ』丸善出版 二〇一三・一一・五)

(4) 牧洋子『金子光晴と森三千代』(中央公論社 一九九六・三・一八)

(5) 「自序」には「自分の欲しいと思つてもどうしても得られないものへ対する郷愁」ともある。

(6) 古典を題材とした小説『更級抄』(『むらさき』一九四一・六・九)・『和泉式部』(協力出版社 一九四三・八)でも、女性主人公による京と地方間の移動が大きな意味を持つている。

(7) 木村一信「森三千代の『ジャワの旅』——その特徴と意味と」(池内輝雄・木村一信・竹松良明・土屋忍編『外地』日本語文学への射程』双文社出版 二〇一四・三・二八)

(8) 単行本では紀行文『をんな旅』・『新嘉坡の宿』(興亜書房 一九四二・二・二十五)、小説集『南溟』(河出書房 一九四〇・一一・一六)・『国違ひ』(日本文林社 一九四二・三・二五)があり、

(9) 趙怡「森三千代の仏印訪問と南洋文学」(趙前掲書 所収)

(10) 森三千代『をんな旅』「あとがき」

(11) 森三千代「サルタンの花嫁」(『をんな旅』所収)

(12) 森三千代・松本亮「金子光晴の周辺 4 パリへ」(『金子光晴全集 月報4』中央公論社 一九七六・一)

(13) 「南溟」には「ジャバ女達が、人の好い薄笑ひをうかべて、彼女に道をひらいた。二ヶ月のあひだに、笙子の方でも、彼等との人種的な区別を特に気にせず、彼等のあひだにまじつて歩いてゐるのがあたりまへのやうな気持になつてゐた。笙子は自分がジャバへ旅して来たのではなく、生れ故郷へ帰つて来たのだと思ひ込まうとした。さうすると、新しい感情が展け、ジャバ人達に同人種でもあるかのやうな親しみが湧いた」とある。

(14) 趙前掲論文

(15) 金子光晴『西ひがし』(中央公論社 一九七四・一一・二〇) より

び『絶望の精神史』(光文社 一九六五・九・一)。引用は『金子光晴全集』第七卷(中央公論社 一九七五・一一・二〇)および第十二卷(一九七五・一二・二〇)による。

(20) 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流——国際文化振興会の創設と展開』(有信堂高文社 一九九九・八・五)。なお本稿では、

(16) 例えば佃光治・加藤至徳『南洋の新日本村』(南北社出版部 一九一九・一・二〇)には「娘子軍が各地に侵入して行く後から五尺の男子が追随して行つたのは事実である」「売淫婦として異人種より侮辱されながらも相当の地盤を作つたのは全く我が娘子軍の功労と云はねばならぬ」とあるが、同様の記述が光晴の『マレー蘭印紀行』でも「彼女達を『娘子軍』と称して先頭に立て、瀬ぶみをさせてそのあとから、男達が乗込んで商利の足がかりを

作る」(引用は『金子光晴全集』第六巻 中央公論社 一九七六・三・二・〇)とあり、南進の先駆者とする言説が一般化していたことが分かる。旅行記については西原大輔『日本人のシンガポール体験 幕末明治から日本占領下・戦後まで』(人文書院 二〇一七・三・三〇) 第三章第二節「娘子軍および政治活動家」に詳しい。小説では徳永直「島原女」(『新潮』一九三三・九)・「女の產地」(『中央公論』一九三五・九)、鮫島麟太郎「からゆきさん」(『週刊朝日傑作文芸選集5 事実小説集』朝日新聞社 一九三九・八・六 所収) 等がある。

(17) 清水洋・平川均『からゆきさんと経済進出』世界経済のなかのシンガポール——日本関係史(コモンズ 一九九八・四・一〇)

(18) 嶽本新奈『からゆきさん——海外〈出稼ぎ〉女性の近代』(共栄書房 二〇一五・五・二五)

(19) 金子光晴『詩人』(平凡社 一九七三・一二・五)。引用は『金子光晴全集』第六巻による。

和十六年度事業概況』の照会を依頼した所、該当年度及びその後に、森三千代派遣に関する記載はないとのことだった。戦時下の刊行物でも「昭和十七年一月外務省より文化使節として仏印へ派遣される」(『おもかげ』所収の「著者略歴」とある。「文化使節」

の位置づけについてはより検証が必要だと考える。なお照会に応じて下さった国際交流基金ライブラリーおよび、その労を執つていただいた熊本県立図書館に感謝申し上げる。

- (21) 柳沢健「文化外交と各国の文化事業に就て」『経済俱楽部講演』第七十九輯 東洋経済出版部 一九三五・二・二二 所収
- (22) 『財団法人国際文化振興会 昭和十年度事業報告書』(国際文化振興会 一九三七・三・三〇)
- (23) 江口圭一『十五年戦争小史 新版』(青木書店 一九九一・五・二五)
- (24) 桑原規子「国際文化事業から対外文化工作へ 一九四一年の国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」」(五十鈴利治編『帝国』と美術 一九三〇年代日本の対外美術戦略』国書刊行会 一〇一〇・一一・二五 所収)
- (25) 土屋前掲論文
- (26) 趙前掲論文
- (27) 土屋前掲論文
- (28) 阮進朗『安南文化と日本文化』『国際文化』一九四一・六)
- (29) 張雅「森三千代の仏印小説における二つの交遊」『人文×社会』二〇二二・六)
- (30) 伊福部敬子『結婚の前進』(新大衆社 一九四三・四・三〇)
- (31) 嶽本前掲書